

「ハレとケ〜ことばのいらない日〜」

## 第一幕 ふるさとアート

(ミンミンゼミの鳴き声。照明…明転。舞台中央、椅子に座っているアデ。椅子の横にはレゴが入った袋とスケッチブックが置いてある)

今日も「希望の里」の1日が始まります。私の名前はアデです。インドネシアから来ました。ここで技能実習生をしています。

(立ち上がって)

ここは諫早にある「希望の里」。静かな森に囲まれた中、障害の重い大人の人たちが大勢で生活しています。私は同じ実習生のミヤさんとリンさんと一緒に、そんな人達のご飯やお風呂、色んなサポートするのが仕事です。大変な事もある仕事だけど、頑張ってやっています。

(車が駐車場に入る音)

8月30日。今日はお客さんが来ました。男の人が2人。小松さんと富井さん。外国から技能実習で来ている私たちから話を聞きたいらしい。

(ドアが開く音)

「こんにちは。私の名前はアデです。インドネシアから来ました。日本語は…まだちょっと難しいです」

(レゴの袋とスケッチブックを手にとって)

みんなの自己紹介が終わったら、小松さんがテーブルの上に大きな袋やスケッチブック、それと色鉛筆を出して来た。袋の中にはたくさんのレゴブロックが入ってる。

「私の国を紹介するコマースィアルを作る？レゴを使ったり、絵を描いて？」

ミヤさんとリンさん、それと富井さんはレゴで町みたいなの作り始めてる。じゃあ、私は……。

「上手く描けるかわからないけど…絵にします」

小松さんが先生。みんなとたくさん話しながら、私がまだ知らない日本の事を教えてくれる。インドネシアの事も良く知ってた。

(描いた絵を見せ)

「私の国、インドネシア。大きいのか小さいのか、島がたくさんある国。日本の人はバリ島が良くわかるかな？私が住んだのはジャワ島の隣で、大きな橋を渡って行ける。インドネシアには綺麗な海や森、立派なお寺もたくさんある。だから、ボルブドゥールの遺跡とかミステリーな所を7つ描いた。全部、私の自慢」

他の人の紹介、とっても面白かった。私は上手く紹介出来たかな？どの国もすごく素敵な所。ミヤさんとリンさんのミャンマーは花がたくさんあって、日本には眼鏡？の形した橋がある。どの国にも街があって、色んな人が居て、森や海、田んぼに畑があって、どこか似てるね。なんか面白い。

(間)

今日はコレで終わり。次は9月。利用者みんなと一緒にお芝居や踊ったりするみたい。「良かったら参加して下さいね」って、小松さんが言ってた。仕事のシフトが合ったら、また参加したいなあ。ミヤさんとリンさんも同じ事言ってた。

(照明…暗転)

## 第二幕 ハレの時間

(ツクツクボウシの鳴き声。照明…明転。舞台中央にアデ)

今日は9月13日。あれから2週間経ちました。お昼ご飯が終わって、みんなが少しゆっくりしていると小松さんと富井さんが来ました。

(ドアが開く音)

マコトさんやケンタさん、嬉しそうに挨拶してた。私も負けないう、笑顔で挨拶。

「こんにちは！」

シヨウコさんは一生懸命「あー、うー」って話しかけている。お客さんが来て楽しいみたいだ。そんなみんなに声かけながら、小松さんと富井さんは2階に上がって行く。今日は何するのかな？私も参加するから行かないと。

(間)

あー、今日はヒロシさん、何か調子悪いなあ。あちこちウロウロしながら、たまに「あー！」って声出したり、壁叩いたり…置いてある物、投げたりしないよう気を付けないと。みんなもちょっと落ち着かない感じ。

そんな中、小松さんは一人一人の利用者さんに「お名前、何ですか？好きな物は？」って、聞いて回り始めた。

最初はマコトさん。「マコトです。ラーメン、ラーメン好き」って、小松さん見ながら一生懸命話してる。小松さんが「ラーメン、良いですね。僕も好きですよ」って答えたら、嬉しそうに頷いてた。

(間)

次はケンタさんの番。好きな物聞かれてるけど、なかなか上手く言えないみたい。それでも慌てない小松さん。色んな食べ物の名前出して、ゆっくりケンタさんの反応見てる。

(間)

へえー、カレーなんだ。インドネシアのカレーはサラサラして、サッパリして、あまり辛くないから日本のカレーとかなり違うね。あつ、カレー好きな人って聞かれたら、他の人たちも嬉しそうに手を上げてるよ。

(突然、小松さんから呼ばれて)

「えっ？あつ！名前はシヨウコさんです。好きな食べ物？…シヨウコさん、何が好き？うん、うん…えーと、何だろう？ミヤさん、何だっけ？あー、バナナか」

(間)

次は…ノブオさんの番か。小松さんに名前聞かれてるけど、答えられるかな？ノブオさん。言葉で話すの苦手だから…そうだ。

「ケンタさん、ケンタさん。ノブオさんの名前を小松さんに教えて上げて。そう、ノブオさんの名前」

私がそう声かけたら、ちょっと困った顔して少し考えるとノブオさんの部屋の前に行った。何してるのかな？ドアの横の柱、指さしてるけど。

そしたら、一緒に行った富井さんが「名札？あ、これが名前なんですね！」だって。

(笑いながら)

そうか！そんな伝え方あるんだ。ケンタさん、凄い！

(ラジオ体操「英語版が流れ始める」)

全員聞き終わったら、次はラジオ体操が始まった。立ち上がってやる人、椅子に座ったままやる人。寝転がってる人もいる。みんな、自分が一番やりやすい形で参加してた。

「1、2、3、4…2、2、3、4…1、2、3、4…2、2、3、4…」

ヒロシさん、ウロウロしなくなった。楽しそうに両手を振ってる。

「1、2、3、4…2、2、3、4…。ヒロシさん、良いね。上手、上手」

(ラジオ体操が終わり、炭坑節が流れる)

次はこの曲。小松さんがリズムに合わせて手を叩く。みんなも一緒に手を叩く。私も叩く。

(間)

小松さんや富井さんが手を叩きながら踊り出す。みんなも一緒に手を叩いて踊る。私も踊る。

(間)

一人、二人、三人…小松さん先頭にして、段々踊りの輪が出来て来た。私も入った。歌の意味は解らないけど何か楽しいなあ、これ。

「ノブオさん、座ってないで一緒にどう？踊る？よし！踊ろう！」

(照明…徐々に暗転、炭坑節…徐々にFO)

## 第三幕 ケの時間

(照明・明転。舞台中央にアデ)

今日は10月11日。職員さんが「秋だけど、まだまだ暑いね」って言った。私には、日本の季節はまだ少し分かりにくい。インドネシアでは、季節はもっと単純で暑いか、すごく暑いか、雨が多いか、少ないか。「今日も暑いね」と言われても、どう返事をしたらいいのか、ちょっと考えてしまう事があります。まあ、インドネシアよりは楽かな。こういう小さなズレは、誰にも怒られないけど、誰にも説明されないまま、毎日の中に静かに積もっていく。

(下手を見ながら)

あっ、今日も小松さんと富井さんが来たみたいです。

(ドアが開く音。目の前を通る小松と富井に挨拶するアデ)

「こんにちは！」

(2階(上手)へ向かう二人を見送りながら)

挨拶はしたけど、私の今日の担当は1階だから、みんなと一緒に踊るのは出来ないかな。今からお風呂の準備して、着替えの手伝いや見守りしないといけないから。

(ラジオ体操流れる)

2階でみんながラジオ体操しているのが聞こえて来る。そういえば、インドネシアにも似たような「セナム」ってのがあったなあ。今度、みんなと一緒にやってみようかな？

(上手側を見て)

…あれ？ケンイチさん、何回も2階と1階を行ったり来たりしてる。

「ケンイチさん、どうしたの？…ああ、騒がしいのが苦手。大丈夫、もう少ししたら終わるから。いつものお部屋の感じになるよ。うん」

(少し考えて)

「あっ、そうだ。今のうちにお風呂入ろうか？…えっ？今日は良い？そうなんだ」  
出来たら入って欲しいけど、どうしよう？もう少ししてから、また誘ってみよう。

(間)

1階に戻って来た小松さんと富井さんが職員室に入っていく。これから何するのかな？

「何か準備する物ありますか？私も手伝います」

(お面を取り出す)

「お面？これで何かするんですか？」

インドネシアには「トベン」と呼ばれる有名な仮面劇があります。色んな形のお面、鮮やかな衣装、「ガムラン」の音色。踊りながら神様へ贈る昔からの物語。私は小松さんのお面を見ながら、それを思い出しました。

「解った！これ使って踊るんですね。…え？何もしない？そこにいるだけ？」

私は少し戸惑った。お面は、神様や精霊、人ではない存在と人との境目に立つもの。だから、お面を見ると自然と「特別なこと」が始まると思ってしまう。それに、日本では「役に立つこと」「意味が分かること」が、とても大切にされている気がしたから。

そんな私に小松さんが「ハレ」と「ケ」について説明してくれた。

「お祭りのような時間が「ハレ」。いつもの生活が「ケ」ですか…」

「ハレ」と「ケ」。最初は、難しい言葉だと思った。でも、インドネシアにも似た考えがある。辛いラマダンが終わった後の特別な日「ハリラヤ・プアサ」。日本で言ったら、お正月に近いイメージかな？

「お面をつけて、ただ側にいるだけ。それだけでも、そこから生まれるものがある」

そう言って、お面を付けてマントで体を包んだ小松さんは、職員室から静かに出て行きました。

(間)

「あっ、入浴介助の続きをしないと」

私も職員室から出ました。フロアの中にも、変装した小松さんが見えます。小松さんは、ただ黙ってそこに立っているだけ。お面とマントを付けただけなのに、利用者の中に居るいつもと違うもの。

「えっ？うん？なんだろうね、あれ」

私の答えに笑って「おぼけ？」と返すマコトさん。近寄って話しかけるショウコさん。ちょっと離れて見ている人も居た。だけど、誰も騒いでいない。

みんなにとっては、いつもの場所。いつもの人たちと過ごす「ケ」の時間。そこに名前も役割も説明もない存在が、突然混ざり込んできた。少しだけ違う…けど、いつもの風景。

(間)

ソファに座るノブオさんの隣に小松さんが黙って座る。ノブオさんは、ただ見つめるだけ。ノブオさんは拒否していない。受け入れたという感じでもない。ただ「そこにいる」ことを、そのままにしている。

その様子を見ながら、私は考えていました。日本で生活していると外国から来たというだけで説明を求められたり、距離を取られたり、最初から「分からない側」に置かれることがある。

同じように、世の中で「分からない側」「少数側」にされがちな障害のある人達が、ここには、たくさん生活している。だから、この場所では、みんなが「普通」で、小松さんの方が少し違った存在になる。

マジョリテイとマイノリテイが簡単に入れ替わる瞬間。

私は思いました。「排除されない」ということは、必ずしも「理解される」ことじゃない。説明されなくても、意味が分からなくても、同じ空間に、同じ時間に一緒にいられること。

それだけで、共存は始まっているのかもしれない。

(他の職員から呼ばれ、洗濯物の入ったカゴを受け取る)

「あっ、はい。ケンタさんの洗濯物ですね。ケンタさん、これ、持って行ってください」

カゴを持ったケンタさんが洗濯室に向かう。その後ろを、両手で何か抱えたポーズながらヒョコヒョコ付いて行く小松さん。

「あれは…カゴ？」

それが聞こえたのか分からないけど、私の横にいたケンイチさんが小さな声で「物まね？」って言って、クスクス笑ってる。普段、あんまり表情変わらない人だから、ちよっとビックリした。

#### 第四幕 言葉のいらぬ日

あれ？ケンイチさんが入浴カゴを持ってきた。気が変わったのかな？

「ケンイチさん、お風呂入る？」

ウンウンと頷くケンイチさん。あつ、廊下に立ってる小松さんをジッと見て、何か考えてるなあ。怖いかな？…そう思っていたら、小松さんの手を握って歩き出した。

「ケンイチさん、小松さんをお風呂場に案内してるの？」

また、ウンウン頷くケンイチさん。お風呂場に着くと「行ってきます」みたいに手をヒラヒラさせて、中へ入っていった。小松さんも「行ってらっしゃい」って、手を振り返す。

「気持ちが悪ければ、言葉はいらぬ」

それを見ていた富井さんの言葉。私もそう感じました。

(間)

職員室に戻ると小松さんがスマホで動画を見せてくれた。パン人間ってパフォーマンスらしい。

(スマホでパン人間のパフォーマンス動画を見る)

最初は、正直、少し変だと思いました。顔にパンを巻いた人が、ただ歩いているだけ。何かをするわけでも、意味を説明するわけでもない。

「：聞いた事あります。キリスト教では、人はパンとワインで出来ているって。：パンは命に関わる食べ物。そんな身近な物になりきるのが：パン人間」

(スマホをそつとふせて)

私がそう言うと、小松さんは、静かにうなずいた。

「パンは、命に関わる食べ物。特別じゃないけど、生きる為に、いつもそこにある。だから、パン人間は、目立たなくていい存在なんです」

小松さんが言った「目立たなくていい」。その言葉が、胸に残った。

日本では、役に立つことや分かりやすいこと、説明できることが、とても大事にされる。

でも、パン人間は、役にも立たないし、説明もしない。ただ、そこにいる。少し変で、何者なのか分からなくて、でも、誰かに危害を加えるわけでもない。ただ、「よく分からない」「違っている」という理由だけで、距離を取られてしまう存在。

パン人間も…お面の人も…そして、日本で働く私も…もしかしたら、同じ場所に立っているのかもしれない。

「毎日、同じ道を歩いて、誰にも注目されない存在が、実は、社会を支えている。パン人間は、そういう人たちの姿でもある」

その言葉を聞きながら、私はさっきまでの光景を思い出していました。

マコトさんが「お化け」と笑った事。

シヨウコさんが、お面の人に何度も話しかけていた事。

ノブオさんが、ずっと同じ場所に座ったまま見ていた事。

ケンイチさんが物まねに笑った事。

(間)

そして…何も言わずにケンイチさんが、小松さんの手を取った事。

案内して、振り返って、手を振った事。

どれも記録には残らない。日報にも、たぶん書かれない。何かが大きく変わった訳じゃない、言葉のいない時間から生まれた、ちょっとした変化。言葉がなくても伝わるもの。そう、確かに気持ちには行き来していました。

(間)

「ハレ」と「ケ」。

最初聞いた時は、特別な事といつもの事、そんな風に分けて考えていました。

でも、今は、少し違います。

踊らなくても話さなくても、お面をつけて、ただ一緒にいるだけでも、それは、ちゃんと「ハレ」になって、また、静かに「ケ」に戻っていく。

インドネシアの「トペン」も、踊る前に、ただ、そこに立っている時間がある。音が鳴る前、物語が始まる前。その「何も起きていない時間」「目立たない時間」が、一番大事なのかもしれぬ。

(遠くでラジオ体操の音が、一度だけ微かに聞こえる)

洗濯物をたたむ音。お風呂の準備の音。誰かの笑い声。今日も、「希望の里」の一日が続いています。

(椅子の横に置いてあったスケッチブックを手に取る)

今日も「ハレ」は一瞬だけ来て、すぐに「ケ」に戻ります。でも、戻った後、何かが少しだけ残る。

(小さく息を吸って)

それで、十分。

(スケッチブックを胸に抱き、客席を見る)

ここは、諫早にある「希望の里」。森に囲まれた、静かな場所。

そして…私の大切な「ケ」の時間です。

(照明…ゆっくりと暗転)

(終幕)